

島根大学 ラフカディオ・ハーン研究会 ニューズレター 第19号

編集：島根大学ラフカディオ・ハーン
研究会事務局
所在地：〒690-8504
島根県松江市西川津町1060
島根大学法文学部 宮澤研究室
発行：2024年 1月 20日

【研究小論】

ラフカディオ・ハーンと大谷正信

常松 正雄（島根大学名誉教授）

島根県尋常中学校での英語の授業で、ハーンが生徒に作文を書かせて、それらを、日本人の考え方、生活の諸相など、自らの日本文化研究の様々な面の研究資料として使っていたことは、周知のことである。「ハーンは日本理解の契機の一つを教育の現場、特に生徒たちの作り出す英作文内容の中に見い出そうとしたのである。」¹⁾と述べられている。例えば優秀な生徒としてハーンが目にかけていた大谷正信は、4年生と5年生の時に、26編の作文を提出しているが、それらの主題は以下のとおり多岐にわたっている。

「ホトトギス、最も偉大な日本人、最も偉大な日本人 そのII、螢、大山と呼ばれる山、牡丹、雛祭り、世に最も怖いものは何か？、幽霊、天皇誕生日、作文：創造者、宍道湖をボートで行くこと、亀、宍道湖、松江の春日について、日本猿、古代日本の様式 そのI—住居、古代日本の様式 そのII—衣服、ラフカディオ・ハーン先生へ、剣道、先週土曜日の運動会について、百足、この夏休みをどう過ごしましたか？、梟、夜、飛んで灯に入り焼け死ぬ虫について、作文：秋の散策。」²⁾

これだけ見てもハーンが、自らの日本研究に生徒の作文をいかに使っていたかが窺えるが、彼は他の生徒にはまた別の主題を課しているところを見ると、当時の生徒たちは貴重な協力者であったと言ってよかろう。特に大谷との関係は、その後も長らく続くことになる。

大谷が、帝国大学で教鞭をとることになったハーンを慕って帝国大学に入学すると、学費が豊かでない大谷を助けるために、ハーンは彼の学費援助のために、自分が調べたいと思う事項や資料を収集して提供する仕事を与え、それに相応する金額を、いわば奨学金の形で与え続けたからである。大谷は、後年、先生のこのような温情がなかったならば、自分は帝国大学での勉学を全うすることはできなかつただろうと述べている。

大谷が大学を卒業した後も、ハーンの資料収集への協力は続いている。1897年は、ハーンが帝国大学に移ってから2年目であるが、その年の4月29日付で大谷に送られた手紙は、「どうか、今月は、仏教関係の俚諺Buddhist proverbsの蒐集をやってみてください。」³⁾という依頼から始まっている。

このように、いわば自らの日本研究の資料収集に多大な貢献をした大谷ではあったが、この「松江時代からの愛弟子、大谷正信が紙布を東京で買って小泉家に持参し『松江土産です』とウソを言ったため、ヘルンから嫌われ破門同様になった。」⁴⁾と言われている。

しかし、彼の大学生時代には、親身になって彼の将来の仕事について助言をしているのは事実である。⁵⁾将来身を立てるには科学者になるのがよかろうと伝えたハーンに対して、自分は文学で身を立てたいと伝えた大谷に対して次のよう述べている。

「科学を専門とする職業を選べば、(中略)あなたが実際生活的な意味で独立していただけることもできましょう。これに反して、文学の方は、あなたにとって、おなぐさみ以上の何者(ママ)かにまで押し上げられてゆくださるうとは、わたくしには想像できません。英国においてさえ、文学で飯を食うことは途方もなく困難であるし、文学で拔群の名声を博することはなおさらです。(中略)おそらく、あ

あなたのほうが、自分ご自身の関心事が何であるかということについては、わたしよりもずっとよくわかっていらっしゃるはずです。

文学に関する助言と言うことになると、わたくしに言い得るのは、ただ、古い時代の作家よりも近代作家を読むよう努力すべきだということ、すべて文学上の偉大な作品の根底に横たわっている洗練感情センティメントおよび情緒気分エモーションを学び取るよう努力すべきだということ、これのみに尽きます。(中略)あなたに対して特に助言しておかなければなりません、あなたには、自分の国の言葉 *your own language* を勉強してほしいのです、そして、外国文学に接する場合にも、自分たちの国語に新しい活力ストレングスとか雅致グレースとかを付与しようという目的のみを考えて接するようにしてほしいのです。(中略)日本において英文学を教えるなんてことは大きな誤りである、とわたくしは考えています。」⁶⁾

ところで、この大谷は、ハーンが、松江を去って熊本に転勤する際には、全校を代表して次のような英語での送辞を送っている。⁷⁾

Dear Teacher:— You have been one of the best and most benevolent teachers we ever had. We thank you with all our heart for the knowledge we obtained through your kindest instruction. Every student in our school hoped you would stay with us at least three years. When we learned you had resolved to go to Kyūshū, we all felt our hearts sink with sorrow. We entreated our Director to find some way to keep you, but we discovered that could not be done. We have no words to express our feeling at this moment of farewell. We sent you a Japanese sword as a memory of us. It was only a poor ugly thing; we merely thought you would care for it as a mark of gratitude. We will never forget your kindest instruction; and we all wish that you may ever be healthy and happy.

MASANOBU ÔTANI
*Representing all the Students of the
Middle School of Shimane-Ken*

以上ハーンと大谷の関係を少し紹介したが、我々がハーン作品や、他の文学作品を読む場合にも、この大谷に対するハーンの助言を心して読むべきであろう。

註

- 1) アラン・ローゼン、西川盛雄『ラフカディオ・ハーンの英作文教育』玄書房、2011、204頁。
- 2) 同上、205頁。
- 3) 『ラフカディオ・ハーン著作集 第十四巻』恒文社、1983、353頁。
- 4) 梶谷泰之『ヘルン百話』八雲会、2016、38頁。
- 5) 『ラフカディオ・ハーン著作集 第十四巻』恒文社、1983、339-41頁。
- 6) 同上、342-43頁。
- 7) Lafcadio Hearn, *Glimpses of Unfamiliar Japan*, Vol. 2, Houghton Mifflin Co., 1894, pp.685-86.

サードプレイスとしての読書会

三成 清香 (島根県立大学)

2023年4月に島根県立大学に着任し、ラフカディオ・ハーン研究会の読書会を見学させていただく機会がありました。そこでは参加者の皆さんが *Out Of The East Reveries and Studies in New Japan* (『東の国から』) に収録されている *JIUJUTSU* (「柔術」) に向き合われていました。それぞれの読み解きと、それに関連する事柄の議論が自由に、そして盛んに行われ、まさに読みを深め、味わいなおす空間だと感じました。

その4か月後、群馬英米文学談話会という存在を知ることになりました。談話会の清水武雄先生から会誌 *SHIRANAMI* (39号) をお送りいただいたからです。そこには、会員による翻訳が掲載されており、ヴァージニア・ウルフ、ヘンリー・ジェームズ、ドリス・レスリング等のほかに、ハーン作品が4作品載っていました。どの作品の訳にも「訳者あとがき」が続き、そこにはそれぞれの作品に対する担当者の考えが書かれています。訳の後には「2022年10月オンライン談話会」と記されているので、この会誌は、コロナ禍の中、オンラインで談話会が継続され、議論がなされた成果のたまものだろうと思われまます。

島根大学のラフカディオ・ハーン研究会の読書会と、群馬英米文学談話会、そして世界中に存在するであろう「読み」を通じた集いは、どのような役割を果たしているのでしょうか。例えば、群馬英米文学談話会の会誌には「本会は会員相互による翻訳技

術の研鑽と翻訳能力の向上を目指すことを目的とする」とありますが、実はそれ以上の“効果”があるのではないかと思われてなりません。それはサード・プレイス^{サードプレイス}としての機能です。

サードプレイスとは、レイ・オルデンバーグ氏が『サードプレイス—コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』中で提唱する概念で、家(第一の場所)でも、職場(第二の場所)でもない、第三の場所のことです。すなわち、「その人にとって特別な場所」を指します。ある場所がサードプレイス化する際、そこにはいくつかの特徴がみられると言います。①中立の領域である、②社会的地位は関係なく、皆が平等である、③会話が主な活動である、④アクセスしやすい、⑤良い雰囲気を作り出す常連がいるが、新参者に対してもオープンで親切である、⑥地味である、⑦遊び心に満ちている、⑧参加者を根付かせるもう一つの我が家のような雰囲気がある……といったものです。

ハーンにとってのサードプレイスはどこであったでしょうか。それはセツが語る怪談の中に、あるいはセツとの議論の中にあっただかもしれません。一つ一つの物語に、ハーンを何事からも解放する特別な魔力があったことは間違いないでしょう。サードプレイスで描かれた物語を読み、語り、他者から刺激を受ける……といった一連の流れが、今、新たなサードプレイスを生み出していることは、とても素晴らしい循環だと思います。

ラフカディオ・ハーン研究会の読書会や、群馬英米文学談話会、そしてあらゆる集いで、人々がよりオープンマインドになり、好奇心をもって世界を見つめていくこと、お気に入りの場所とそこでの人とのつながりをかけがえのないものだと感じるものが、今こそとても重要だと思います。

【参考文献】

レイ・オルデンバーグ『サードプレイス—コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』(みすず書房、2013)

【 学 生 部 の 活 動 報 告 】

みちのく八雲会に学ぶ東日本大震災 —学生部の仙台・石巻研修

宮澤 文雄 (島根大学法文学部)

令和5年度の学生部の活動テーマは、「小泉八雲と災害」です。その取り組みの一環として昨年9月、東日本大震災の被災地である宮城県仙台市と石巻市で2泊3日の研修を実施しました。

1日目は、仙台市で、「まちづくりNPOげんき宮城研究所/みちのく八雲会」代表の門間光紀氏を講師にお招きし、津波被害の実態や当時報道されなかったことなどについてお話していただきました。当時まだ小学生だった学生たちは、はじめて知る内容に驚くことばかりで、熱心に耳を傾けていました。



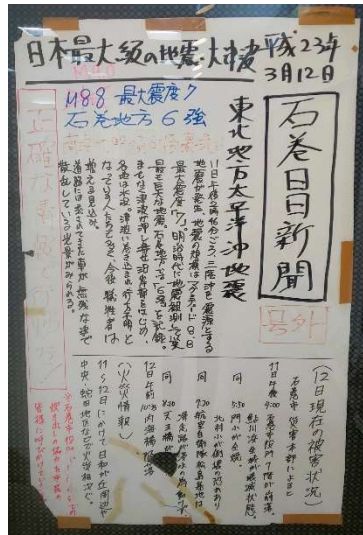
門間氏(左)による講義

2日目は、最も被害の大きかった石巻市を訪問しました。前日に続いて門間氏に協力をお願いしました。当時多くの住民が非難した日和山に案内してもらい、北上川の河口を望みながら、津波がまちをどのように襲ったかを解説してもらいました。



下山後は海岸方面へ移動。そこで「震災遺構 門脇小学校」(画像左)と「みやぎ東日本大震災津波伝承館」の二つの施設をみちのく八雲会の方々と一緒に見学しました。当時、門脇小学校の一带は6メートルを超える津波に襲われ、校舎は火災によって全焼しました。津波で火災が発生した理由は、校庭に停めていた避難者の車が浸水して出火し、それが

校舎と衝突して引火したからだといわれています。地域全体が甚大な被害を受けたため、消火活動が遅れ、3日間燃え続けました。泥まみれの下駄箱。窓枠も黒板もない教室。崩落した壁や天井のコンクリート片で埋め尽くされた床。骨組みだけになった机と椅子。かつて子どもたちの明るい声が響き渡っていたはずの学び舎の面影はありませんでした。そこは「展示」というより「現場」にちがひなく、そうした津波火災の生々しい爪痕を学生たちはただ黙って見続けていました。



その後、駅方面に戻る途中で、〈6枚の壁新聞〉を展示する「石巻ニューゼ」にも立ち寄りしました。

〈6枚の壁新聞〉(画像左)とは、石巻日日新聞社が地震の翌日から6日間続けて発行した手書き新聞です。まちが浸水し、回転機が使えない状況でも、住民に向けて正確な情報を届け続けました。地元新聞社の執念と使命感が感じられるものでした。

石巻グランドホテルでは、みちのく八雲会の方々が学生たちを歓迎してくださり、親睦を深めました。一人ひとりから被災体験もお聞きしました。

全体研修の後、学生たちは各自の調査計画にしたがって被災地をめぐるりました。それぞれ向かった先で、地元の方々から震災当時のお話が聞けたようです。被災地を見て回るだけでなく、そこで暮らす人たちと交流しながら学べたことで、学生たちにとって石巻は「あの人のいる石巻」となり、とても近い存在にもなりました。ご協力頂いた皆様には、この場を借りて厚く御礼申し上げます。



元日には能登半島で地震があり、大きな被害と悲しみをもたらしました。学生たちの受けとめ方も研修前と後では違っていると思います。

最後に、研修に参加した学生たちの感想をご紹介します(昨年10月執筆)。

「現地での気づきと恐怖」

浅野 菜菜／法文学部言語文化学科3年

今回の研修で得た一番の学びは、震災前後のギャップを目の当たりにしたことです。現地では震災にあった小学校だけでなく、荒浜地区の住宅基礎まで足を運び、これらが当時の被害の大きさをあらわしていることを理解しました。一方で、荒浜地区の住宅基礎付近を見渡すと、道路は整備されているのに住宅が一切ないということに気づきました。震災の出来事を知らないまま、ここを訪れたとしたら、津波によって一帯の住宅が流されてしまったことなど、とても想像できないと思いました。実態の一部しか映らないテレビのニュースでは得られないことを、この研修で学ぶことができました。この学びを、今後の活動に活かしていきたいと思います。

「強さ」

奥田 美雪／法文学部社会文化学科2年

東日本大震災は小学生の頃、実際に体験し、揺れの大きさや計画停電に怯えていたのを覚えています。それでも、私の居た地域は震度5弱で、石巻の震度や被害とは比べ物になりません。実際に被災された方々に聞く石巻の当時の状況は生々しく、直接聞かないと分からないことばかりでした。そのような、人によっては思い出すのも苦しい記憶を閉ざすことなく、人に伝え続け、中には家や会社が半壊したり、浸水したりしたにもかかわらず自分は助け合って生活できてラッキーだったのだと笑って話す強さに驚き、心から尊敬しました。本当に貴重なお話を聞く機会をいただき、ありがとうございました。

「ほんものを見る・聞くこと」

陰山 悠華／法文学部社会文化学科3年

東日本大震災が起きたあの日、私は小学校のお別れ遠足が雨になり教室でお弁当を食べていました。私にとって震災の思い出は、少しだけ特別な、普通の日に起きたことでした。

研修を通して一貫して感じたことは、実物が訴えかけるメッセージ性の強さです。門脇小学校には、小学生たちが過ごした教室が被災したままの姿で展示されています。そこには、確かに誰かが過ごしたということが嫌というほど伝わり、言葉を失いました。

被災者であるみちのく八雲会の皆様のお話は、衝撃的でした。普通の日常に突然やってくる震災の被害はこれまでの私の知識では計り知れないもので、私にとっての震災に対する思いも、この研修を機に変わったのではないかと思います。

今回の研修ではほんものを見て聞くことで、文字や映像資料では分からない東日本大震災のことを知りました。震災貴重なお話を聞かせてくださったみちのく八雲会の皆様、本当にありがとうございました。



みちのく八雲会の皆さんと学生部

「宮城県研修に参加して」

末平 愛唯／法文学部言語文化学科 3年

今回の研修に参加して最も印象に残ったのは、みちのく八雲会の方々から伺った当時の体験談です。

私は当時の津波等の様子をテレビで見た事しか無かったので、避難した人の中で役割分担をしながら生活していたことなど、実体験を伺ったことでメディアからだけではわからなかった現実を知り、衝撃を受けました。

特に、直接津波や地震による被害を受けた方だけでなく、震災後に電気を使用する医療器具が機能せず、それによって衰弱してしまった方もいらっしゃったとお聞きして、このような、災害から間接的に起こる影響についても理解し、防災のために何ができるのかを改めて真剣に考える必要があると感じました。

「それぞれのストーリー」

多々納 彩華／法文学部言語文化学科 3年

今回の研修では、震災の被害に遭われた方のお話を聞く機会が多くありました。中でも印象に残っていることは、仙台市荒浜地区を訪れた際にたまたま乗ったバスの運転手の方が、自身の震災の経験を私たちに話してくださったことです。業務ではないにも

かかわらず、様々なことを教えていただきました。荒浜には津波から逃れることのできる高所が荒浜小学校しかなかったこと、荒浜にあった自身の家が津波によって流されてしまったことなど、私たちが震災について調べていることを知ると、自身の経験を伝えてくださりました。お話を聞いたことを有り難く感じるとともに、震災は一人一人のなかに、それぞれのストーリーとともに存在していることを学びました。今回の研修で話を聞き、遺構をめぐる中で、多くの思いを受け取ったと感じています。学び、受け取ったことをこれからの活動に活かしていきたいと思います。本当にありがとうございました。

「宮城での学び」

高野 七暉／人間科学部人間科学科 2年

宮城に行ったのは初めてだったので、島根とも地元とも違う街並みや文化に触れられてとても新鮮でした。地元も必ず地震と津波が来ると言われている地域で、より防災意識を高めようという気持ちになりました。また、地域によって防災教育や意識が全然違うことに驚きました。小泉八雲と自分の学問分野に関連するところでは、震災が起きた時に障害のある人がどのようにして避難して生き延びることができたのかに興味を持ったので調べてみたいです。とても貴重なお話や、体験を本当にありがとうございました。



震災遺構門脇小学校

「経験しなければ得られなかったこと」

西村 茉奈美／法文学部法経学科 3年

今回みちのく八雲会の皆様のお話を聞き実際に被災地を訪れたことで、私の東日本大震災への見方が変わりました。震災が起きた当時私はテレビで津波の映像を見ていて今でも鮮明に思い出せるぐらい衝撃的な出来事でした。しかしメディアを介した情報で私は震災を知った気になっていたのだからということが今回の経験を通して気が付きました。助け

たくても助けられなかった人たちの存在、流れてきた車から引火した学校では火災から逃れようと瞬時に判断して行動しなければならないという生と死を争う緊迫感など実際に被災地を訪れたり、お話を聞いたりしなければ見えてこないことばかりでした。この貴重な体験を生かして次の世代に伝えていくために我々にはそのようなことができるのか考えていきたいと思います。

「知られざる苦しみ」

林 修蔵／法文学部言語文化学科 3年

今回の研修では、被災された方々との交流や、被災した場所を訪れることで多くの学びがありました。被災した小学校は当時の状態がほぼそのまま、火事で煤けた校舎や、泥がついたままの黒板などを見て、当時の状況がはっきりとわかるようでした。その中でも特に印象的だったことは被災した方の話です。震災時に生徒の命を助けようと一生懸命だった小学校の先生方が、助けられなかった生徒に対する申し訳なさや保護者からの非難の板挟みに陥ったという話を聞いて自分も苦しい気持ちになりました。これから、今後何かが出来よう、震災について情報を集めそれを活かしてわずかばかりではありますが貢献していきたいと思います。

「一瞬の選択」

吉田 怜夏／法文学部言語文化学科 3年

被災時は一瞬の選択が迫られ、そしてそれが命を左右した。タクシー運転手が語ってくれた。

《運転手は津波から逃れるために高台を目指して車を走らせていた。道路はひどい渋滞で一向に進まない。ふと上を見ると高台から誰かが手招きしている。「ああ、津波がすぐそこまで来ているのか」。そう思った運転手は反対車線を突っ切った。反対車線はあいていた。津波から逃げようとする人ばかりで、こっちに来ようとする人はもちろんいない。運転手は全速力で車を走らせた。そして、助かった。》

他の渋滞にあっていた車はすべて津波に飲み込まれたというのは、後から知ったそうだ。いざというとき、私は反対車線を通ること即座に決断できるだろうか。

【 読書会の記録 】

事務局長 横山 純子

第 161 回例会

2023年8月5日(土) 13:30~15:30.

島根大学学法文学部135教室 参加10名

“Beauty is Memory” (*Exotics and Retrospectives* Little, Brown, and Company, 1898, pp. 199-207.) & “Jiujutsu” (*Out of the East*, Houghton, Mifflin and Company, 1895, pp. 183-242.), pp. 204, l.19-207, l. 9, p. 183, l. 1-p. 184, l.15.

第 162 回例会

2023年9月9日(土) 13:30~15:30.

島根大学学法文学部 135 教室 参加 10 名

“Jiujutsu,” p. 184, l. 16-p. 185, l. 17.

第 163 回例会

2023年10月14日(土) 13:00~14:50.

島根大学学法文学部 135 教室 参加 8 名

“Jiujutsu,” p. 188, l. 18- p. 192, l. 9.

第 164 回例会 総会&読書会

2023年11月11日(土) 13:30~15:30.

松江市国際交流会館第一研修室 参加 9 名

“Jiujutsu,” p. 192, l. 10- p. 193, l. 8.

第 165 回例会

2023年12月9日(土) 13:30~15:30.

島根大学学法文学部135教室 参加13名

“Jiujutsu,” p. 193, l. 10- p. 197, l. 11.

12月役員会で、20周年記念事業実行委員会が立ち上げられました。今後、2025年度の実施に向けて準備を進めていく予定です。

1月例会では、会員で、広島大学大学院博士後期課程・島根大学非常勤講師の横山竜一郎氏の博士論文の成果報告「John Donne: The Making of a Poet, c. 1590–1676 (ジョン・ダン: 1590年頃から1676年における詩人の形成)」を行います。初期近代の英国詩人ジョン・ダン(1572-1631)の詩人像形成に、彼の友人たちが果たした役割等についてお話していただきます。

編集後記:

今回も皆様方から多彩なご寄稿をいただきありがとうございました。折しも北陸震災、学生部からの報告は貴重な記録となりました。

(高橋栄)